

(参考資料一)

見逃した方のために…NHK 追跡！真相ファイル「低線量被ばく 揺れる国

際基準」文字起こし

- オープニングのVTRが流れます

室井: 幼稚園とかも普通にやっていますね。こんな住宅街の中にあるんですか？

ナレーション: 福島第一原子力発電所の事故から9カ月、私は作家の室井佑月さんとともに千葉県柏市を訪ねました。原発からおよそ200キロ、一部の場所で今も放射性物質が検出されています。

リポーター: 住民の人たちにとって本当に驚きだろうし…

室井: 不安だと思いますよ。

<ナレーション> 一児の母親でもある室井さんは、同じように不安を抱える人たちからの依頼を受けて、各地で放射線量を測る活動を続けてきました。

室井: 0.55(マイクロシーベルト)毎時。

リポーター: 年間にすると…4.8ミリシーベルト。

<ナレーション> 食品に含まれる放射性物質の量を調べる民間の施設です。国は障害100ミリシーベルトを上限に食品の安全基準を定めています。しかし人々の反応は…

母親の声「子どもに関しては、この数値でも心配だなと思っています」「みなさん今の(国の)基準を信じている方はいらっしゃらないと思います」

室井: だから、やっぱり根拠なんですよ。「ただちに影響がない」とか言われても根拠がないので、よけいっそう不安なんですよ。

<ナレーション> 国が根拠としているのがICRP(国際放射線防護委員会)が定める基準です。100ミリシーベルト以下の低線量の被曝のリスクは極めて小さく、ほとんど影響がないとしています。本当にそうなのか？

<ナレーション> 低線量被曝の実態を調べるため、追跡チームは海外取材しました。チェルノブイリ原発事故の影響を受けた北欧スウェーデン。放射線のレベルはあまり高くなかったこの地域でも、ガンが増えています。食べ物を通して被害が広がっていると見られています。

住民: 私たちは何も悪くないのに、なぜこんな目に遭うのでしょうか。

<ナレーション> さらに国際基準を作ったICRPの当事者たちにも取材。低線量のリスクはどう決められたのか。驚くべき事実が明らかになりました。

ICRP名誉委員: 「低線量のリスクはどうせわからないのだから、半分に減らしたところで大した問題はない。」

「科学的な根拠はなかった。我々の判断で決めたのだ」

- ここから本編に入ります

<ナレーション> 揺れ動く国際基準。知られざる低線量被曝の実態とは…追跡が始まる。

<ナレーション> これまで、ほとんど影響がないとされてきた低線量被曝。それに疑問を投げかける事態が世界で起きています。スウェーデン北部ベステルボッテン県。古くから少数民族サーメの人々が暮らしてきました。

住民: いま周辺でガンが増えています。放射能が原因ではないかと疑っています。

<ナレーション> 原因と見られているのは、25年前に起きたチェルノブイリ原発事故。放射性物質を含んだ死の灰は、1500キロ離れたサーメの町まで降り注ぎました。当時の放射線レベルは、年間およそ0.2ミリシーベルト。国際基準の5分の1程度の低いレベルでした。

<ナレーション> しかし今、ガンになる住民が増えています。事故の前と比べると、34%増加しました。事故直後スウェーデン政府は、食べ物に含まれる放射性物質の安全基準を設けました。人々がよく食べるトナカイの肉は1kgあたりの上限が300ベクレル。

<ナレーション> 現在の日本の暫定基準値(500ベクレル)より厳しい値です。サーメの人々は食べる肉の量も減らし、身体への影響を抑えようとしてきました。

住民:いつガンになるかわからないし、子や孫への影響も心配です。

<ナレーション> なぜガンが増えたのか。住民の調査を続けてきたマーティン・トンデル博士は汚染された食べ物を体内に取り込むことでリスクが高まったのではないかと見ています。トンデル博士は汚染地域で暮らすすべての住民110万人のデータを解析。

<ナレーション> ガンになった人の被曝量を調べると、事故後10年間の積算でいずれも10ミリシーベルト以下だったことがわかりました。ICRPがほとんど影響がないとしている低線量でも、ガンになる人が増えていたのです。

トンデル博士:この結果に驚きました。明らかになったリスクがICRPより高かったからです。リスクは外からの被曝だけでなく、内部被曝に左右されるのです。

<ナレーション> 次に追跡チームが向かったのは、世界一の原発大国アメリカ。ここではより影響を受けやすい子供たちに深刻な問題が起きていました。イリノイ州シカゴ郊外。周辺に3つの原発が集中しています。原発から排出される汚水には放射性トリチウムが含まれていますが、

<ナレーション> アメリカ政府は国際基準以下なので影響はないとしてきました。しかし近くの町では子供たちがガンなどの難病で亡くなっていました。6年前に建てられた慰霊碑。足元のレンガにはこれまでに亡くなった100人の名前が刻まれています。

住民:これが亡くなった息子の写真です。この痛みは誰にも伝えずに抱えてきました。

<ナレーション> 住民を代表し、被害を訴えている親子がいます。シンシア・ソウヤーさんとその娘セーラ(18)さんです。セーラさんは10年前、突然脳腫瘍を患いました。治療の後遺症で18歳になった今も身長は140cmほどしかありません。

セーラ:みんな死んでしまったのに、私だけが生きていて悲しいです。

<ナレーション> セーラさんが脳腫瘍になったのは、この町に引っ越してきて4年目のことでした。

シンシア:セーラはあの井戸の水をまいて遊び、食事をしていたんです。病気になってからはシカゴから水を取り寄せるようになりました。怖かったので、その水で料理をし皿を洗い、歯を磨かせていました。

<ナレーション> ソウヤーさん夫妻はガンと原発との関係を証明するため、州政府からあるデータを取り寄せました。過去20年間、全住民1200万人がどんな病気にかかったかを記した記録です。小児科医の夫ジョセフさんが分析したところ原発周辺の地域だけが脳腫瘍や白血病が30%以上増加。

<ナレーション> なかでも小児ガンは、およそ2倍に増えていました。ソウヤーさん夫妻は全住民の徹底的な健康調査を求めました。しかし国は「井戸水による被曝量は年間1マイクロシーベルトと微量で健康を脅かすことはない」と回答してきました。

シンシア:あまりに多くのものがセーラから奪われてしまいました。低線量の被曝が何をもたらすのか知ってほしいのです。

- NHKのスタジオ

室井:いまのVTRはショックでしたね。基準値内だと「リスクは低い」って言い方をするんですけど…ガンにかからない人もいだろうけど、セーラさんみたいにかかってしまう人もいるわけで。だから「リスクは少ない」という言い方は、逆に言うと「リスクを背負い込む人もいる」ということですね。

鎌田:彼女の場合は具体的にどのくらいの量の被曝をしたと考えられているんですか？

西脇:それが彼女がどれだけ被曝したのかはわかっていないんですね。政府や電力会社は「基準以下だったの健康被害はない」として、実際の被曝量を測っていないんです。

室井:そんなの、すごくわかりづらいですね。子供が病気になったとしたら、別に損害(賠償)を求めたいんじゃないくて、病気にかかる前の健康な状態に戻してもらいたいと思うけど…それは、かかってからだと無理な話じゃないですか。

西脇:これはどれだけ被曝したらガンで亡くなるリスクが高くなるかということを示したグラフです。ICRPでは100ミリシーベルトでは0.5%ガンになるリスクが高くなるとしています。一見すると「大したことないじゃないか」と思われるかもしれませんが、例えば1万人の人がこれを浴びた場合は、

西脇:50人が、100万人の人が浴びた場合は5000人がガンで亡くならなくてもいい方がリスクを負ってしまうと。

鎌田:我々がいつも疑問なのは、じゃあこれ(100ミリシーベルト)より低い場合は…これが正しいかどうかも含めて、本当にこれでいいのかどうか分からない。

室井:しかも幼児や子供はもっとリスクが上がるじゃないですか。

西脇:まさにそのところはVTRで見ていただいた通りに、内部被曝の影響とか感受性の高い子供への影響ということで。やはり低線量であっても影響が高いのではないかという意見もある一方で、少しずつ浴びていく場合には細胞が放射線に対して抵抗力を持つとか…

西脇:そういうような理由で低いんじゃないかという意見もあって、ここ(低線量被曝)での意見は分かれているわけなんです。

鎌田:意見が分かれているという現状について、ICRPは今どういうことをやろうとしている？

西脇:そうですね、実はそのICRP自身がこの基準を見直すべきかどうか議論を進めていることがわかってきたんです。

- 再びVTR

<ナレーション> 10月、アメリカでICRPの会議が開かれました。ICRPはおよそ30カ国250人の科学者や政府関係者でつくるネットワークです。会議の一部だけが音声での取材を許可されました。福島第一原発での事故を受けて低線量被曝のリスクの見直しを求める意見が相次ぎました。

会議での発言:「8歳や10歳の子供がなぜ原発労働者と同じ基準なのか。福島母親や子供たちは心配している」「ICRPの低線量リスクがこのままでいいのか、大きな疑問が持ち上がっている」

<ナレーション> ICRPは低線量のリスクをどう見直そうとしているのか。カナダのオタワにある本部に直接聞くことにしました。事務局長のクリスファー・クレメンズ氏です。すでに作業部会を作り、議論を始めているといいます。

クレメンズ:問題は低線量のリスクをどうするかです。

<ナレーション> クレメンズ氏は私たちに驚くべき事実を語りました。これまでICRPでは低線量の被曝のリスクは低いとみなし、半分にとどめてきたというのです。

クレメンズ:低線量のリスクを半分にしていることが本当に妥当なのか議論している。

<ナレーション> 低線量のリスクをめぐる議論は、実は1980年代後半から始まっていました。基準の根拠となっていた広島・長崎の被爆者データがこの頃修正されることになったのです。それまで原爆で1000ミリシーベルトの被曝をした人は5%ガンのリスクが高まるとされてきました。



<ナレーション> それが日米の合同調査で、実際はその半分の500ミリシーベルトしか浴びていなかったことがわかったのです。半分の被曝量で同じ5%ということは、リスクは逆に2倍になります。しかしICRPは低線量では半分のまま据え置き、引き上げないことにしたのです。

クレメンズ:この問題は何度も議論されてきた。なぜ引き上げなかったのかは、私が委員になる前のことなので詳細はわからない。

<ナレーション> なぜ低線量のリスクを引き上げなかったのか。私たちは議論に関わったICRPの元委員に取材することにしました。調べてみると、ある事実がわかりました。当時の主要メンバーは17人。そのうち13人が核開発や原子力政策を担う官庁とその研究所の出身者だったのです。

<ナレーション> その一人、チャールズ・マインホールド氏。アメリカ、エネルギー省で核関連施設の安全対策にあたった人物です。電話での交渉を重ねて、ようやく私たちの取材に応じました。チャールズ・マインホールド氏、1970年代から90年代半ばまでICRPの基準作りに携わってきました

<ナレーション> 低線量のリスクを引き上げなかった背景には、原発や核関連施設への配慮があったといいます。

メインホールド:原発や核施設は、労働者の基準を甘くしてほしいと訴えていた。その立場はエネルギー省も同じだった。基準が厳しくなれば核施設の運転に支障が出ないか心配していたのだ。

<ナレーション> メインホールド氏は自らも作成に関わったという、エネルギー省の内部文書を取り出しました。1990年、ICRPへの要望をまとめた報告書です。低線量のリスクが引き上げられれば、対策に莫大なコストがかかると試算し、懸念を示していました。

<ナレーション> メインホールド氏はアメリカの他の委員と協力し、リスクの引き上げに強く抵抗したといいますが。

メインホールド:アメリカの委員が低線量では逆に引き下げるべきだと主張したのだ。低線量のリスクを引き上げようとする委員に抵抗するためだった。

<ナレーション> その後ICRPは、原発などで働く労働者のために特別な基準を作ります。半分のまま据え置かれていた低線量のリスクをさらに20%引き下げ、労働者がより多くの被曝を許容できるようにしたのです。

メインホールド:労働者に子供や高齢者はいないので、リスクは下げてもよいと判断した。科学的根拠はなかったが、ICRPの判断で決めたのだ。

<ナレーション> いまアメリカでは原発や核関連施設で働いていた人たちが、相次いで健康被害を訴えています。女性たちは核燃料の再処理施設で、長年清掃の仕事をしていました。体に異変が起きたのは、仕事を辞めてしばらく経ってからのことでした。

元労働者:乳がんと喉頭がん、そして顔に皮膚がんを患っています。

<ナレーション> 健康への影響はないと信じて働いてきた女性たち。いま国に対して補償を求める訴えを起しています。

元労働者:私たちはモルモットでした。どんなに危険かも知られませんでした。

- NHKのスタジオ

室井:ICRPの人が出てきましたけど、「根拠がない」って。「半分に減らしてもかまわない」みたいなことを言ってきましたけど、「根拠がない」って初めて聞いたんで驚いちゃったんですけど。

西脇:ちょっとこちらをご覧くださいんですけど、これは2010年のICRPの予算がどこから来ているのかを示したもののんですけども、アメリカの原子力規制委員会を筆頭に、原子力政策を担う各国の官庁から・各国政府からの寄付によって成り立っているんですね。

順位	組織名	金額 (円)
1.	アメリカ原子力規制委員会	250,000
2.	欧州共同体委員会	130,455
3.	ドイツ原子力安全官	115,021
4.	日本原子力研究開発機構	45,000
5.	カナダ原子力安全委員会	40,000
合計		617,168

西脇: 日本も原子力を推進する日本原子力研究開発機構が毎年それなりの額を寄付していると。

室井: そうするとICRP自体が原発を推進したい人たちの側が作ったものだから、安全基準値を決めるわけだから…それじゃいけないんですよ。

西脇: ICRPというと日本では科学的な情報を提供してくれるイメージがあるんですけども、彼ら自身も繰り返し言っていたんですけども…彼らは政策的な判断をする集団だと。どこまでが許容できて許容できないのかを、政治的に判断する組織だと。

室井: ということは、自分で判断していくしかないと思うんです。しかも安全な方に。どれだけ取らないようにするか、自分で決めていった方がいいのかなと思いますね。

鎌田: 低線量でも実は被害が出ているんじゃないかという海外のケースをこれまで見てきたんですけども…いまの我々と決定的に違うのは、彼らはこういうことだと全く知らなかったわけですね。その基準自体も曖昧だ、あるいは基準に沿っていけばいいわけではないということを彼らは知らなかった。

鎌田: 我々は少なくとも知ってるわけですから…。国に対してこういうことを求めたいということが…もしあるとすれば、どうですか？

室井: 正しく怖がるには、やっぱりある程度情報公開してくれないと…知らないのが怖いと思うんです。知ったら、それをもとに考えることができるから。いちばん…情報を上げてこないというのが良くない気がします。

鎌田: それを政府に求めたいということですね？

室井: 求めたいですね。

- 最後のVTR

<ナレーション> 原発の近くで暮らし、幼いころ脳腫瘍を患った18歳のセーラさんです。治療の後遺症で右手が麻痺し、いまも思うように動かすことができません。被曝から健康を守るための基準があるのに、自分のような被害が後を絶たないことにやりきれない思いを感じています。

セーラ: 科学者には私たちが単なる統計の数値でないことを知ってほしい。私たちは生きています。空気と水をきれいにしてください。たくさんの苦しみを味わいました。誰にも同じ思いをしてほしくありません。

<ナレーション> 日本政府は食品のさらに厳しい安全基準を新たに示し、4月から適用することになっています。「自分と同じ苦しみを誰にも味わってほしくない」セーラさんの言葉を重く受け止めて、私たちは放射能のリスクにこれから立ち向かっていかなければならないのです。

以上